

# バイリンガル育成拠点と若者のトランスナショナルな生活圏の構築について

- 日本・ボリビア間の移動を事例に -

## The Influence of Bilingual Schools on the Formation of Transnational Spheres of Life: A Case Study of Migration between Japan and Bolivia

落合知子 (摂南大学・現代社会学部)

Tomoko Ochiai (Setsunan University・Faculty of Contemporary Social Studies)

キーワード：バイリンガル育成拠点 トランスナショナル 継承日本語 存在論的移動

### 1. 本研究の背景と目的

人の国際移動は学歴や階層によって異なるパターンが見いだされる (是川,2020)。日本とボリビアの間でトランスナショナルな生活圏を築く日系人にとって継承日本語とスペイン語のバイリンガルであるか否かということもまた移動パターンに大きな影響を与えることが予想される。

本研究は日本・ボリビア・第3国間の国境を越える移動を繰り返し、トランスナショナルな生活圏を築いているバイリンガルの若者に着目し、バイリンガル育成拠点が人々の移動と教育戦略にいかなる影響を与えているのか、ひいては社会資源として「移動」の意味をとらえなおすことを目指すものである。

### 2. フィールド概観および研究方法

工藤他 (2015)、松田 (2022) が指摘するようにボリビア・サンタクルス市近郊のオキナワ移住地・サンファン移住地の人々は3世代にわたって日本語を継承することに成功している。両移住地には継承日本語・スペイン語の2言語による公立、私立の初・中等学校計3校 (第1日ボ校、ヌエバ・エスペランサ、サンファン学園) がバイリンガル育成拠点として存在し、これまでバイリンガル人材を輩出してきた。この3校は午前中にボリビア教育省の定める教育課程に従いスペイン語での授業を行い、午後に日本語で日本語と日本文化が教授されている。本研究ではこの3校を擁するオキナワ・サンファンの両移住地の出身者はバイリンガル育成拠点を持たないサンタクルス市出身者と比較して、その移動に特有のパターンがあるのか、析出を試みた。

2023年2-3月ボリビアのサンタクルス市とオキナワ移住地・サンファン居住地での関係者へのインタビューと2023年7月の横浜市鶴見区での出稼ぎとして来日している若者及び関係者への聞き取り調査とライフストーリーインタビューを行った。また両移住地およびサンタクルス市出身者を対象にしたスノウボール方式のアンケート調査を基に両移住地出身者特有の国境を越えた移動の形態と教育戦略を概観した。

### 3. 結果

#### ①バイリンガル育成拠点出身者の特徴-高い継承日本語能力

両移住地出身者とサンタクルス市出身者との間では継承日本語能力に大きな違いがあった。日本語検定 N1 取得率が3校の出身者は60%、62%、71%以上で、アンケートに回答したほぼ全員が N3 以上の検定結果を持っていた。それに対してサンタクルス出身のアンケート回答者の N1 取得率は17%であった。

#### ②バイリンガル育成拠点出身者特有の移動-頻繁な移動と日本滞在の資源化-

両移住地出身者は若年のうちに日本での1年から数年の短期間の滞在経験を持ち、日本語能力の向上と日本とのネットワークの更新を図っている様子がうかがえた。またそうした短期の日本滞在は第3国やボリビアでの大学入学や起業の資金・技術の獲得の場として活用されているケースも見られた。

#### ③子育てと老後はボリビアで

移住地出身者は子育てに関しては日本ではなく、サンタクルスか移住地で継承日本語とスペイン語のバイリ

ンガル教育を受け、バイリンガルとして成長してほしいと願っている者が多かった。また、老後は移住地に戻り、余生を送りたいと願う声が集まった。逆にサンタクルス市出身者は日本での子育てや老後を望むものが移住地と比較すると多かった。

#### 4. 結語と今後の課題

人の物理的な移動の動機をハージは存在論的移動性から説明する。存在論的移動性とは人が抱く「自分たちはうまくいっている」あるいは「どこかに向かっている」という感覚であり、その人の「見込みのある人生」の前提となっている、という（ハージ,2022p.69）。なじみ深い場所で「うまくいって」いれば良いが、そこで「どこにも行き場がない（Going nowhere）」あるいは「ドツポにはまる（Stuckedness）」ことで存在論的移動性を失うと、なじみ深い場所から「より良い発射台」を求めて物理的移動を行うことで、再び「うまくいっている感覚」=存在論的移動性を得ようとする（ハージ,2007p.41）。

ボリビアのサンタクルス市近郊の2つの移住地出身のバイリンガル人材は物理的移動を繰り返すことで、トランスナショナルなコミュニティ・ネットワークと言語資源を更新し、自身とコミュニティの「実存論的移動性」を獲得していることが伺えた。

バイリンガル育成拠点が育む移住地のメンバーの日本語能力は、人の移動の駆動力（ハージ,2022）であり、同時に人の移動によって更新され、蓄積される社会資源でもある。人の移動がもたらすコミュニティの言語資源、資本とスキルとネットワークの蓄積を特に次世代の育成に活用するために働き盛りでもある子育て世代が移住地を教育の場を選ぶ志向性が観察された。

今後の課題としては日本側でボリビアからやってきた人々のバイリンガル能力が生かせないまま、バイリンガル人材もそうでないものも単純労働力として扱われている。日本側でもバイリンガル人材を適切に評価し、医療・介護・教育などの現場で、「人を育てる」システムの構築し、さらには日本でもボリビアに学びながら複言語複文化環境にある子どもたちを加算型バイリンガルに育むシステムを構築しボリビアとの間で WIN - WIN の関係を築くことはできないか検討していきたい。

#### 主要参考文献

ハージ,G (2022) 塩原良和等監訳『オルターポリティクス』明石書店

同上 (2007) 塩原良和訳「存在論的移動のエスノグラフィ」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う』有信堂

是川夕 (2020) 「日本における外国人の人口動向（その2）誰が日本を目指すのか？『アジア諸国における労働力送出し圧力に関する総合的調査（第一次）』に基づく分析」人口問題研究 76 (3)

工藤真由美他編 (2015) 『日系移民社会における言語接触のダイナミズム：ブラジル・ボリビアの子供移民と沖縄系移民』大阪大学出版会

Lwis,M.P & Simons, G.F.(2010) Assessing endangerment : Expanding Fishman's GIDS. *Revue Roumaine de Linguistique*,55 (2)

松田真紀子 (2022) 『日系をめぐることばと文化:移動する人の創造性と多様性』くろしお出版

小山真弓 (2022) 「ボリビアのコロニアオキナワにおける教育史と現在の教育環境:沖縄県系移民 2 世以降の言語継承」移民政策学会 2022 年度冬季大会抄録

芝野淳一 (2016) 「国境を超える移動実践としての進路選択-グアムに住む日本人高校生の存在論的移動性に着目して」『異文化間教育 43 号』

\* 本研究は科研費基盤研究 C (課題番号 21K00614) 「ボリビア地域社会における言語資源としての継承日本語教育に関する研究」(研究代表吉富志津代) の研究成果の一部である。